

師走を迎えて

分所長 高木 敏彦

早いもので今年もあと一カ月を残すだけになりました。世界情勢はいつ世界戦争が起りかねない緊迫した状況が続いています。来年から令和5、6、7年とミロクの世の先駆けとなる年となつて平和な世の中になることを祈りたいと思います。

今月号には、先月の秋季大祭での松永特任宣伝使の講話のエッセンスを掲載させて頂きました。「家族の皆様にもお読みいただけること願っています。

寒い時ですが、お体に気を付けて人型活動にお励みください。

私の入信経緯

松永 孝司

入信の経緯についてお話をせよとのことですが、話せば五分で終わってしまうので、少し無駄話を交えながらお話をさせて頂きます。

私は名古屋で生まれ育ちましたが、幼少の頃より体が弱かった。五、六歳で命を終えても不思議でない虚弱児でした。父親の転勤で静岡に移住して自然環境の中で過ごし、なんとか健康に過ごせるようになった。終戦後名古屋に戻り、中学校と成長して会社勤めをするようになったが、その頃にも突然目の前が真っ暗になったり怖い夢を見て奈落の底におちていくようなことがしょっちゅうあった。自分でも長生きはできないなあと思ひ、自分の人生の意味とかを考えると何か生きてきた証を残したいと思つていた。その時に子孫を残したいと思つた。そうした時に叔父から見合い話が持ち上がった。刈谷の人の見合い話で、自分も見合いをしてみる

気になった。先方さんもなぜか見合いをして結婚をすることになったが、後日談ではあるが、女房は大本信者で靈感のある人の話で、二月頃に西の方から来る人と縁談がまとまるということを知り、私との見合いがその通りであり結婚する気になったとのことであった。女房は熱心な大本信者であり聖師様の観音像を持参しており毎日拜んでいた。

長男が誕生した際に女房がすぐに長男の入信届を出すというので三河本苑と一緒にいき、届け出をするときに、一緒に私も入信届を出すことになってしまった。そうこうするうちに本部から来る色々な本とか新聞などは全て私宛に送つて来た。女房はあなた「家長」だから当たり前だといつて文句を言う私を取り合ってくれない。

二人目の子が出来、手狭になった平屋建てを総二階建てに改築し部屋が増え神棚を作ることになった。この時に建前の材木が近所の子の火遊びで燃えたり、大雨で水をかぶつたりで火と水の洗礼を受けたことが後になり分かった。そのうちに聖師様没後三〇周年とかで機関長推薦で宣伝使になってしまい何の資格もないのに本部に行き御手代を三代様より頂いた。心の中でこんなもので病気なんかがあるものかと思つていたら、三代様にじろつと睨まれた。

宣伝使になり、少し経ち女房から知り合いが刈谷総合病院に入院しているが末期のがんで苦しんでいるからお取次ぎをしてほしいといわれ、無理だと断つたがあなたは宣伝使なのだから行けというので仕方なく病院に行った。行くとベッドに縛り付けられた患者さんが麻酔も効かず痛みを耐えかねて七転八倒している。必死に祝詞を上げてみると、何故か急に静かになってしまい「りや死んでしまったかなと驚いたら、寝息をたてて寝ていた。一週間後亡くなったとの連絡があり葬式に参列したら、喪主が「松永さんのお祈りをして頂いてからすっかりと平穩な

日々を過ごして安らかに旅立ちました、」それからが大変でいるんな人から一杯のお取次ぎの依頼が来るようになった。お取次ぎの偉大さを実感させられた。

人生は修行の場であるとの大本の教えであるがまさにその通りである。生まれてくるときにみんな自分の一生の計画を立てて生まれてきている。病気になるのも、いろんなことが起きて苦しむのもすべて「み魂磨き」をするために仕組まれている。今年で八五歳になり残りの人生を過ごす中で、みるくの世の実現を見たいというのが望みです。ご清聴ありがとうございました。

主な行事予定

二月一八日(日) 午前一〇時より

第二ブロック担当 前日午後より掃除準備

三河本苑一二月月次祭 全体会議

二月二四日(土) 午前九時半現地集合

万祥殿献勞奉仕

令和五年

一月一日(日) 午前九時より

元旦祭

一月八日(日) 午後一時半より

碧南分所月次祭 担当第三班

十二月の誕生者

おめでとつございます！

蒲生 昌直 二日 奥谷 孝 坂部 真司 三日
澤田 俊絵 五日 坂部 文彦 九日 市古 正弘
蒲生 眞矢 一〇日 坂野 愛 一三日 鈴木 明美
一四日 小川 隆 二〇日 坂野 花 二三日 蒲生
旭 二三日 石川 雅祥 二五日